

ヴィヴァルディ：ヴァイオリン協奏曲《四季》op.8

ヴィヴァルディ (1678 - 1741) が活躍した時代のヨーロッパでは、宮廷を中心にいわゆる「バロック文化」が繁栄。音楽の世界では、君主の権勢を文化の力で示すオペラが大流行した。あるいはそうした影響の下、器楽のみの作品であっても、音楽と文学との結びつき…例えば詩の世界を華麗な音楽で表現する、といったことがしばしばおこなわれた。

ヴィヴァルディの《四季》も、その典型である。といっても、これらの曲を彼自身がそう名付けたわけではない。『和声と創意の試み』と題されたヴァイオリン協奏曲集の中に登場する4曲のそれぞれの楽章の冒頭に、季節ごとの習俗や風景を読み込んだ詩が付けられているため、この呼び名が定着した。

ヴィヴァルディは、オペラをはじめとする様々なレパートリーを作曲するだけでなく、ヴァイオリンの名手として活躍した。こうした経緯から、彼は自作のヴァイオリン協奏曲集を手がけ、しかも聴衆を驚かせるような斬新な奏法を随所に取り入れた。『夏』の第3楽章に聴かれる嵐の描写、『秋』の第2楽章に登場するいびきの響き、『冬』の第1楽章を特徴づける身震いの音などは、こうした創造性があったからこそ可能になったもの。

なお当時、優秀なヴァイオリニストはオーケストラのコンサートマスターとして、アンサンブルの指揮をとりながら自らの腕前を披露するのが普通だった。《四季》でも、独奏ヴァイオリンとオーケストラが文字通り一体となって、それぞれの季節を鮮やかに描き出す。また本日の演奏曲順は春→夏→秋→冬にて演奏する。

ピアソラ（デシャトニコフ編）：ブエノスアイレスの四季 (ソロ・ヴァイオリンと弦楽合奏版)

イタリア移民の家族、アルゼンチンのブエノスアイレスに生まれるものの、幼少期にアメリカのニューヨークに渡り…。ピアソラ (1921 - 92) は、このような文化的多様性の中で生まれ育っている。ただだからこそ彼は、タンゴからクラシックに至るまで、幅広いジャンルを貪欲なまでに吸収し、独自の作風を確立していった。

『ブエノスアイレスの四季』は、元々「夏」の部分のみが1965年に単体で作られた。舞台作品のための音楽という位置づけだったが、タンゴの強烈なリズムの中に、ヴィヴァルディの《四季》からのひそかな引用がおこなわれる。しかも激しさ一辺倒ではなく、ブエノスアイレスの夏を彷彿とさせる気だるい雰囲気が特徴だ。

次いで1969年に相次いで書かれたのが「秋」と「冬」である。特に「冬」は、『ブエノスアイレスの四季』の中でも、抒情性に富んだ1曲として有名。曲の終盤には、パッヘルベルのカノンを彷彿とさせるコード進行が出現する。最後に生まれた「春」は、同曲集の中でもっとも実験性に富んでおり、ヴィヴァルディの言葉を借りるならば「和声と創意の試み」の典型に他ならない。

元々は、バンドネオン、ヴァイオリン、ピアノ、コントラバス、エレキギターから成るピアソラの五重奏団のための編成だった。これをロシアのデシャトニコフ (1955 -) が、独奏ヴァイオリンと弦楽合奏用に編曲し、しかも本家ヴィヴァルディの《四季》の引用をそこかしこに散りばめるといふ、自由な再創造までおこなった。曲順も、演奏者の判断によって多種多様であるが、本日は神尾真由子氏の意向により、秋→冬→春→夏の順で演奏する。

解説：小宮正安